

卵焼きの中

岐阜西中学校 1年 藤井 敬介

朝練が終わって、静まり返っていた教室の中が急に騒がしくなる。俺が席に着くと、あいつが昨日、何事もなかったように笑顔で手を振り大きな声で教室に入ってきた。俺がシロリと周囲の奴らをにらみつけると、みんなは仕方ないなという顔をしながら、あいつに気付かないフリを一斉にした。誰一人としてその笑顔に対応しなかった。

「なんで今日の朝練来なかったんだよ！」

周囲の空気も読まずあいつは喋りかけてくる。

「はあ？」

俺のイラついた声に周囲の子のほう緊張して背中を向けている。あいつは全く動じず、

「次の大会出るんだろ！夕練はちゃんと出てくれよー！」

無視、ムシ。キャプテンでもなくせに、いつも言うことがウザイ。イライラしていると、俺の心の中の悪魔が微笑んだ。

夕練が終わると、俺はこっそり教室に行った。誰もいないことを確認すると、あいつの引き出しの中を覗いた。そこには、理科の教科書とノートが入っている。予定黑板に目を移すと、

「理科のノート、絶対提出！」

と書かれていた。

「こいつを隠せばー！」

俺は掃除道具入れの上に教科書とノートを置くと、走って教室から出ていった。

次の日、朝練が終わって廊下を歩いていると、教室からあいつの声が聞こえてきた。

「ない！ない！俺の教科書とノートがない！」

あいつが教科書とノートがなくなっていることに気づいたらしい。その必死に探す顔があまりにも面白かったので、笑いそっけなくなった。

俺が席に着くとあいつが走ってきて、

「ねえ、僕の教科書とノート知らない？」

と、困った顔で聞いてきた。俺がやったとバレないようにするために、

「知らねえよ、お前のなんか。」

と少しイラついたような口調で返した。

結局、あいつは理科のノートを提出しそびれ、先生に怒られた。俺は「さまあみろ」と思ったが、なんだか心がモヤモヤしたまま一日中過こした。

家に帰ると、見慣れた母さんの箇条書きの置き手紙があった。俺は手紙を横目に。さっさと冷食の夕飯を済ませ、ソファーに寝転んだ。

友達とスマホのオンラインゲームをしていると、TVからどこかの県でまたいじめによる自殺のニュースが流れた。その度に学校の先生たちは、死ぬ前に相談して、とホームルームで話す。先生も親も被害者のことばかり話し、親は自分の子が被害者になることばかり心配するけれど、実は加害者になっているのかもしれないってことをなぜ想像しないんだろう。親だったら分かるんじゃないのか？親だから分らないのか？被害者じゃないと誰にも相談しちゃいけないのか？自分にしか興味がないから、どうでもいいだろうな、きつと。

母さんは今日も夜勤らしい。LINEも送つたし、0時を過ぎたけれど、何の連絡もない。ゲームの相手もいなくなった。気付いたら俺はうとうととソファーで眠ってしまった。

朝早く、母さんからLINEが入る。今日は給食がない日だから弁当がいるらしいと。俺は慌てて、冷凍してあるご飯を温めて冷食の唐揚げをのせて、学校へ行った。昨日、ソファーで寝たせいか身体が痛い。

給食の時間、俺はカバンから弁当を取り出すと、なるべく誰にも見られないように食べ始めた。周りを見渡すと色とりどりの手作り弁当箱を手に、楽しそうに食べている。

「わあ〜うまつ〜！」

急にそんな声があいつの席のほうから聞こえた。弁当箱を見に行くと、大きくて金色に輝いているきれいな卵焼きがあった。俺は卵焼きを勝手につまむと、口の中へ放り込んだ。口に含んだ瞬間、甘くてふんわりとしていて俺の心にしみた。これが母ちゃんの味ってやつなんだろう。あいつは、勝手に食べたことにまた大声で文句を言ってきたが、無視した。

俺の気持ちを察するように、部活が始まる頃には、予報と違う強めの雨が降り出した。雨

合羽なんて持って来てない。自転車置き場から、急いで出ようとする俺をあいつが追ってきた。今度の大会のことを一方的に話して来る。俺の肩をポンポンと叩いてきた拍子に俺は、振り払った右手の拳で、あいつの頬を力一杯殴った。あいつは水溜りに倒れた。周囲の叫び声を背に、俺は雨の中走り去った。

家に戻ると、ずぶ濡れの俺に全く気づくこともなく、母さんはソファで寝ていた。起こさないように、着替えていると、母さんのスマホが不意に鳴った。きつと担任だろう。母さんは、寝起きなのに、よそ行きな声で、受け答えしている。学校に呼び出されたようだ。俺に気づくと、眉間にシワを寄せて睨み付けた。俺は、悪魔に解放された気がした。